

## 授業記録 資料編

以下は、私が配布したプリントや、学生たちの授業記録の抜粋である。わかりにくいところは最低限鈴木が補ったり、構成を変えたりしたが、大部分は学生たちが書いたままである。実際の記録はこの5倍ぐらい存在する。

細かき字になってもなるべく多く掲載しようと思ったのは、原稿を書き終えた今、受講生に見直してほしいと思うからだ。文章を書き終えてしまうと、人は端から自分がそのようなことを考えていたと思込みがちである。学生たちには、自分がはじめは何を考えていたのかを思い出してほしいと思う。それは彼女たちが自らの成長をたどることであるからだ。

### 【資料①】10月16日 第3回 学生による授業記録(抜粋)

#### 13:00 先生の話

※今回のグループ活動、テーマ【“問い”を立てる！】(10月中に絞り込む)

- ①“問い”は問いかけないと応答してくれない、問うて語るべきものを見つけよう。
- ②仮に立てた“問い”が果たして適切(適正サイズ)か否かは、調べてみないと分からない。(先行研究をレビューする等々)

同時にその“問い”の答えがすでにないかを調べる作業も必要。調べるのは自分の好きなこと、あるいは興味を持てる事だと着手しやすい(予備知識がある可能性が高い)。

→このような作業を経て“問い”をダウンサイジングしていく。

- ③ネタ(対象テーマ)と文化を切り取る視点、あるいは切り取り方(方法)

※現在のグループ(対象テーマ別)は、今後組み換えの可能性あり。(あらゆる視点を持つ人たちをあえて集める等)

※毎回司会者と班活動を記録する書記、発表者を決める事。

13:35~14:00 各グループに分かれて今回のテーマ検討へ移る。(F501、F406にて)

14:07~ 各グループの活動報告と先生のコメント (以下略)

当初の班分け：①身体文化班【稲垣、山城、小幡、谷口】②音楽班【松本、瀨本、吉村、中家、鈴木、林】③伝統文化班【加藤、那須、嵯峨、宮川、土井】④エンタメ班【小池、太田、石野、浜田、小田、中場】

### 【資料②】10月23日 第4回 各班の話し合いの記録(一部の班のみ)

#### ①エンターテイメント班 10/23の話し合いの記録

○先週の話し合いをふまえて調べてきたこと、考えたことの共有

- ・USJ「You are not alone.」というキャッチコピーのもと復興支援活動を行っているというHPに掲載されている。主に募金。⇒結局、お金を集めているだけではないか。被災者の心のケアにはなっていないのではないか。ミッキーが会いに行ったり、被災者を招待したりするのも正直微妙、、、。

- ・宮崎駿のインタビュー「ジブリは復興支援を行っているが、詳細を書くや数字が独り歩きするため支援内容の公表はしない」という文面が、、、⇒何もしていないのではないか。
- ・24時間テレビが「絆」というテーマを掲げる意味とは。
- ・〇〇企業や芸能人などが「震災復興支援の為にこんな活動をしています。」と公表しているのって、企業の評価をあげたいという意図もあるのではないか。
- ・絵と言葉で構成されているマンガで印象に残ったものを語る時、好きなセリフを挙げる人が多い。⇒結局、言葉が一番大事なのではないか。

#### ○「言葉」という論点が浮かび上がる

☆「震災」という言葉があるだけで取り上げられる。そして、しばしば「震災」を商業道具として用いているようにも感じてしまう。しかし、「震災」を支援すると言えば、正しいとしか言えなくて、誰も批判できないのだ。逆に売名行為であっても、それで募金が集まるのであれば、悪いことであるとは言えないのではないか。

- ・表象(representation) = 「語られたこと」と実践(practice) = 「実際に何をしているのか(行動)」との差が自明ではない。

(例)「復興支援」という表象と「24時間テレビでマラソンをする」という実践。直接「マラソン」は「復興支援」に役立つ訳ではないしかし、それをする事によって「募金が集まる」これは正しいから誰も否定できない。

⇒「言葉」というものが人々に与える言葉について詳しく考えていきたいという方向性が出ました。

## ②伝統文化班 10/23の話し合いの記録

### ○伝統文化の役割とは

- ・「伝統文化には高い負荷がかけている」という助言に基づき、その役割について検討
- ・人格の陶冶や心の修養(技術を習得することを通じて心の研磨を目指す)、地域のつながりの強化というようなことが考えられる。
- ・しかし、上記の事柄は現代の文化によっても達成され得るのではないか。(音楽など)
- ・武道の経験があるが、身につけた作法等がそのまま日常生活にも生きているとは言い難い。
- ・前回いただいたコメントの中にもあったように、伝統文化に値するものは固定されている訳ではなく、「語られる」ことによって作られるため、他の文化との境界線は曖昧である。しかし、マンガとは明らかに違う。
- ・伝統文化を定義するのは難しく、危険でもあるかもしれない。グループのメンバーの問題意識に基づいて、伝統文化の定義を差し当たり考えてみてはどうか。

### ○伝統文化としての祭り

- ・被災地における祭事復活のニュースを切り口に、伝統文化としての祭りに着目
- ・伝統文化には、武道や茶道などのように自分で学んでいくものだけではなく、地域の祭りと

いったものも含まれるのではないか

- ・被災地にて、震災の影響で中止されていた年中行事（流鏑馬？）が地域の人々の力によって復活した。
- ・お祭りは直接何かの役に立つわけではなく、復活させたからといってお金がたくさん入る訳でもないが、地域の人々はそれを熱望している。そこに何か生きるパワーのようなものを感じる。
- ・廃れていく伝統文化がある一方で、祭りのように復活する伝統文化もあるのは不思議である。
- ・「祭り」をテーマにする場合、フィールドを福島にするのか、日本全国にするのか。

○「閉じられた文化」と「開かれた文化」について

- ・（伝統）文化は、一部の人々だけしか嗜むことのできない閉鎖的なものではなく、積極的に外部に向けて「発信」されるべきものである。（奈良県庁文化・教育課の方のお話より）
- ・文化を「発信」とはどういうことか。ある文化との接触度は人によって大いに異なることもあり、そこには様々な難しさが存在するのではないか。文化の「発信」という考え方は現代的であるように感じる。この「発信」という考え方が「語られるもの」ということにも関わってくるのかもしれない。

【資料③】10月30日 第5回 授業直前に流したメール「身体文化学演習インフォ」

身体文化学演習 コメント 鈴木康史 20121028

皆さんの話を聞いて、私なりに、「文化に何ができるのか」という大きな問いをダウンサイズしてゆきました。本のタイトルは例えば

「2012年の日本文化（ジャパニーズ・カルチャー）の場所～奈良女生が見る3.11後の文化の姿」

「3.11後のモノガタリの変容～文化は何を語り、どのように語られたのか」

など……。具体的に何を見ていくのか

- ①文化を「語る」という行為について ⇒ 「物語」としての文化 ～何か語られ、何が語られなかったのか。文化は何を語った/語らなかったのか。それを作り出す人は、文化をどう語った/語らなかったのか。実際何が行われ/何が行われなかったのか
- ②お金を集めること/お金が必要であることについて ⇒ 「資本」と文化 ～人は何にお金を払うのか/払わないのか。文化にお金は必要なのか。商業主義はなぜ批判されるのか。震災のためならなぜお金集めが許されるのか。

⇒自分の関心のあるテーマについて上記のような視点で見ると、何が見えてくるのか、どんな資料を集めればいいのか、実際に集めてみると何が見えてくるのか？について、考えて、できる限り資料を集めてきてください。

【資料④】11月6日 第6回 配布プリント「企画書」(抜粋)

論文集の「企画書」 授業は編集会議のつもりで 鈴木康史 20121106

『2012年の日本文化(ジャパニーズ・カルチャー)の場所〜奈良女生が見る3.11後の文化の姿』

第1章 3.11後、文化は何を語ったか/何を語らなかったのか

第1節 語り部たちは何を語った/語らなかったのか【石野、中場、小田、浜田】

第2節 パフォーマーたちに見る被災地支援言説【濱本、中家、林、那須】

第3節 マスメディアは何を語った/語らなかったのか【松本、小池、太田、谷口】

第2章 福島イメージと文化

第1節 「フクシマ」の語られ方、「FUKUSHIMA」のイメージ【山城、吉村】

第2節 炭鉱・原子力・フクシマ フラの街福島【稲垣、小幡、嵯峨】

第3章 文化・行政・地域

第1節 文化と行政 大阪市の事例【加藤、鈴木】

第2節 祭りと共同体 地域復興に対して文化行政の果たすべき役割【宮川、土井】

⇒新しい班分け案

- ①マンガ班【石野、中場、小田、浜田】 ②パフォーマー班【那須、濱本、中家、林】  
③マスメディア班【松本、小池、太田、谷口】 ④フクシマ班【山城、吉村、稲垣、小幡、嵯峨】  
⑤文化行政班【加藤、鈴木、宮川、土井】

(以下各章各節へのコメントは略)

【資料⑤】11月13日 第7回 各班の話し合いの記録(一部の班のみ)

①フクシマ班 11/13の話し合いの記録

A. 震災後の、「福島=原発事故」というイメージ、そもそも「震災前」の福島のイメージは?

(1)震災前、「福島」はどのように売り出されていたか?

- ・女性誌(an・an等)の旅行特集に「福島」はどのぐらい取り上げられていたか  
—1970年代のディスカバー・ジャパンの時期は 一県のHPや干物物、るぶでは
- ・「フラガール」のスパリゾートハワイアンズ←ハワイを福島にもってきた理由とは  
(参考:施設のできた1964年・海外渡航自由化から2年)

(2)震災によって、「福島」はどのように語られるようになったのか?

- ・震災後に、「福島出身」であることが表出した(名乗るようになった)有名人(西田敏行等)
- ・「東北応援キャンペーン」はあるが、「福島応援キャンペーン」はあるのか  
—福島の「震災前」のイメージと関連

(3)「負のイメージ」のある地名

- ・原子力関連…ヒロシマ、ナガサキ、チェルノブイリ
- ・「公害」の地域…四日市、足尾、水俣

→これらの地域の変遷を重ねることで「福島」をみる

—「フクシマ」は、ヒロシマ、ナガサキよりも、公害地域の方が類似性があるか？

## B. 炭鉱・原子力・フクシマ・フラの街福島

A. で語られた「フクシマ」「FUKUSHIMA」の内容（いわば先行研究や現状の「語られ方」の総集編のようなもの）を引き受けつつ、批判的に検討すること、としておく。

(1) 常磐炭田から常磐ハイアンセンター、スバリゾートハイアンズへの流れなど

⇒るるぶ・教科書・ハイアンセンターやハイアンズを経営学的に捉えた研究などを見る

(2) 炭鉱・原発エネルギーの福島

⇒ 元炭鉱現原発、エネルギー産業に翻弄される「福島」イメージのウソとホント、リスクを負う福島、享受する東京 etc. 他の炭鉱跡、原発所在地などとの比較、資料検討

(3) 『フラガール』『スバリゾートハイアンズ』の福島

⇒ オープンから改修、震災前、震災後。いかに語られ、またいかに自らを語ったか。映画や書籍含め資料検討

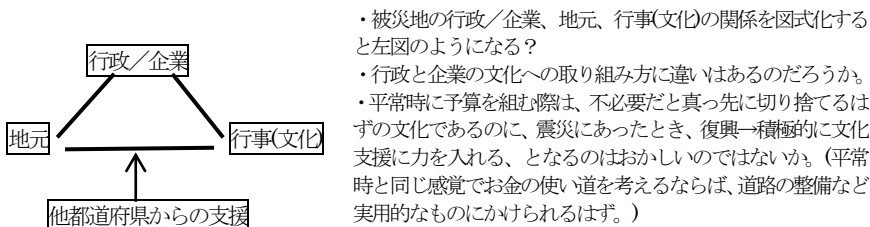
## ②文化行政班 11/13の話し合いの記録

・京都府京田辺市の事例

規模の小さい市に関わらず、12の音楽隊が存在している。また、文化連盟はいくつかのカテゴリーに分かれていて、舞踏の部、書道の部など9つも存在するのに、奈良市には3つしか存在しない。→市によって、文化に対する金のかけ方が違うのではないかな？

・飛鳥藤原の事例 文化財を通して、その土地の文化を発信している。

・大阪市の事例 橋下府知事/市長になったから文化への予算が削られたわけではなく、昔から削られつつあった。



・被災地の行政/企業、地元、行事(文化)の関係を図式化すると左図のようになる？

・行政と企業の文化への取り組み方に違いはあるのだろうか。

・平常時に予算を組む際は、不必要だと真っ先に切り捨てるはずの文化であるのに、震災にあったとき、復興→積極的に文化支援に力を入れる、となるのはおかしいのではないかな。(平常時と同じ感覚でお金の使い道を考えるならば、道路の整備など実用的なものにかけられるはず。)

・文化戦略とは

論文をいくつか調べてみると、「文化戦略」という言葉が多くみられる。つまり、文化も政治の一部として利用されているのではないかな。行政の文化の語り方によって、私たちの中で、型にはまったイメージが出来上がるのではないかな。→与えられた文化を受け取るだけでなく、私たち一人ひとりが文化の関わり方について考えるべき。また、私たちは知名度のある文化(正倉院展など)に触れるだけで満足しているのでは。

・第3章の大まかな流れ

第1節・被災地以外の地域における文化の取り組み方

第2節・被災地における文化の取り組み方(行政編と企業編に分ける)

細かい内容はまだ決まっていないが、ありきたりな商業主義批判にならないようにする。

### ③パフォーマー班 11/13の話し合いの記録

#### (1)伝統芸能

- ・能楽：震災後「息吹の会」発足

東京公演の収益を、岩手・宮城・福島でのチャリティー公演資金に充てる。

公的支援が見込めない被災地での能楽の存続を目指す、チャリティー公演で被災者を励ます  
→ 主目的は被災者支援ではなく、被災地における能楽の存続支援。震災後の会の発足がむしろ能楽界の結束、活性化のきっかけに ⇒ 問題) 支援が形になるまで段階がありすぎるので、時間がかかる

#### (2)スポーツ

- ・バトントワリング：Twile for Japan (関西)の場合

関西有志バトントワラーが211.7.30に支援公演、日本赤十字社に2646,390円を寄付

目的：「演技で気持ちを伝えたい」？ 問題点：行われた公演は1度きり

目的が漠然としており、納得できる言説がない

→マイナースポーツこそ継続が必要？知名度の違い

- ・サッカーの場合

試合前の黙とう(集団)→ただの形式か？

チャリティー試合→ゴールが感動を与える。義捐金。

ゴールが感動を与えるのは、結果論では？

被災地の子どもとのサッカー交流 → スポーツ選手は、パフォーマーなのか？

(勝敗がすべての、アスリートとしての側面)

#### (3)音楽 ミュージシャンの活動の方向性のばらつき

- ・反原発ソング等、震災を受けての楽曲制作
- ・被災地へ行き物資を調達/がれきの撤去など被災地でのボランティア
- ・あえて今まで通りの活動を今まで通り続ける、など・

⇒ くくるのがむずかしい。

#### (4) これからの方向性

4つの分野に絞り、各ジャンル一人で担当し、言説を集める。以下の諸点に注目

○被災地に行ったか/行ってないか/そもそも被災者にしか被災者の気持ちはわからない

→発信者と受信者のズレ

○被災地でパフォーマンスをしたか/してないか パフォーマンスの形は違うのに、「義捐金」になってしまえば同じ形。 →そのパフォーマンスであることの意味？

- 「無力感」に関する発言の有無 無力感発言ができる＝無力感を乗り越えた？  
→無力感の乗り越え方の違い また、無力感を感じなかった人はいるのか？

## 【資料⑥】11月20日 第8回 各班発表用レジュメ（一部の班のみ）

### ①マスメディア班発表用レジュメ

- メディア班の各自の研究内容（今のところ）

松本：ラジオからみる東日本大震災～阪神大震災と比較して

阪神大震災と東日本大震災ではラジオの使用目的が違う。2つの震災を比較しながら、先行研究や本を中心にラジオというメディアを切り口として何を語ったのか/語らなかったのかについて考える。

太田：アイドル研究から考える震災～アイドルは何を発信しているのか。

本当はAKBやジャニーズが震災の時のような復興支援をし、ファンたちはそれをどのように見ていたのかについて関心があるが、資料がなかなか見つからないため、方向を変えているところ。

谷口：社説から考える震災～各新聞社は何を語るのか、語らないのか

「社説比較くん ver4.0」というものを発見したので、それを使って各新聞社が震災について何を語るのか/語らないのかについて考える。各社の価値観も明らかになってくるだろう。

小池：ディズニーから考える震災～メディアは何を語るのか、語らないのか

東京ディズニーランドの34日間の休園で何を人々は考えたのか、プロ野球のセ・リーグの開幕騒動と比較。また、ディズニーの人材教育や、ディズニーランドというテーマパークそのものがアメリカ文化の受容であるという点について、メディアはどう語っているのか/語っていないのかを検討する。）

- どのような順番で章を構成するかは未定。第3節を担当する上で、前の節の人たち、次の章の人たちとの内容の関連を見ながら、どのような順番にするのかを考えていきたい。
- 予定としては、第2節で、このようなことが語られているが、メディアにおいては「語られなかったこと」が存在する…のような感じです。
- 班全体として、メディアが語ったこと/語られなかったことがそれぞれのテーマにおいて見えてきそうである。
- また語られなかったことの中にも、情報規制等で語りたくても語れなかったのか、あえて隠されたのかというような“種類”があると思うので、そのような“種類”にわけて考えるのも検討してみたい。

### ②フクシマ班発表用レジュメ

全体の中では、直接的かつ中心的に「福島」を対象として議論を構成していくのが本章の役割である、という位置付けで考えてみる。「福島」と「文化」、この2つを並べた時に見えてくるも

のが単に「偶然・不幸にも、被災地になった」という悲劇を越えた地政学的物語だとすると……？  
一般雑誌や旅行雑誌における言説分析を中心とした方法を用いてこれを論じてみよう、という方向性で検討中。

(1) 章立て案 (暫定版)

フクシマの章 福島イメージと文化

第1節 「(文化なき?) 福島」→「FUKUSHIMA」へ

—「語られない」「語れない」というゼロ地点から

第1項 『an・an』、『non・no』『るるぶ』『まっぶる』etc.

における「文化」と「福島」／「FUKUSHIMA」… (山城・吉村)

第2節 「炭鉱」「原発」「フラ」「きずな(脱原発)」物語と「福島」／「FUKUSHIMA」

—スバリゾートハワイアンズの物語を手掛かりに—

第1項 2012年の「スバリゾートハワイアンズ」から… (稲垣)

第2項 「炭鉱」から「観光」へ… (嵯峨)

第3項 『フラガール』から「きずな」へ… (小幡)

(2) フクシマの章で扱いたい内容

- ・「福島(県)」という土地…「文化の欠落」という観点から
- ・「福島」／「FUKUSHIMA」の語られ方の最前線
- ・「炭鉱」や「原発」といったエネルギー産業に翻弄される「福島」⇔享受する東京
- ・観光産業としての成功物語(他の旧炭鉱地域との比較など)
- ・『スバリゾートハワイアンズ』とは何か。いかに語られ、いかに自らを語ったか

⇒第2章の大きな流れとしては、「文化なき福島」が今現在「世界の FUKUSHIMA」になっているという流れ(皮肉?)を概観した上で、産業面での炭鉱の衰退によって福島に導入された「フラ」(文化)と「原発」(産業)が、福島にとってどういう意味を持っていた/いるのか、といったことを論じる予定。

③文化行政発表用レジュメ

⇒一般に民主主義の理想とは・・・「送り手」と「受け手」が共に「市民」であり、相互にズレのない世界＝市民と地域の一体感がある

⇒しかし実際は・・・「送り手」である「行政・企業・市民」と「受け手」である「市民」の間にズレが生じる。行政はその修正をしたがる。

文化行政の章 第1節

1. 京田辺市と大阪市の事例 (鈴木)

京田辺 — 田舎 — アマチュアの地域音楽団体

大阪市 — 都会 — プロの音楽団

★京田辺市は「送り手」と「受け手」の間のズレが少なく、「市民」から「市民」への文化



発信ができており、大阪市ではズレが大きいのでは？

## 2. 奈良県の事例 (加藤)

奈良県 — 文化芸術活動に対する意識が高い

既成の文化的土壌を生かした「奈良らしい」文化発信を目指す

★「質の高さ」「高尚さ」を追求しすぎて、「送り手」と「受け手」の間にズレが生じているのでは？

## 文化行政の章 第2節

### 1. 企業と文化の関わり (宮川)

奈良のB級グルメ大会 企業が介入することで定着する文化の可能性を探る

「A級」と言われる、第1節の事例（オーケストラや世界遺産）と「B級」グルメの比較

★「B級」による地域活性化の可能性は？

### 2. 行政による震災後の文化に対する支援 (土井)

★平時には軽視されがちな「文化」が震災という危機的状況において重宝されているのでは？ 行政の行う文化的支援について、復興済の神戸を調べる予定。

## 【資料⑦】12月4日 第10回 各班発表用レジュメ（一部の班のみ）

### ①マンガ班発表用レジュメ

現段階での進行状況 (i) と今後の方針 (ii)

#### (1) 文学者 (小説家) 石野

- (i) 資料として文芸雑誌（「群像」や「新潮」など）を参照している最中。また「群像」に掲載された高橋原一郎の『恋する原発』という小説を中心にしながら文学界の文化的役割（圧力？）について震災に関する他の記事、書籍と比較しながら考察しているところ。
- (ii) この『恋する原発』を最後まで読み込み、今回までに集めた資料とともに震災から浮き上がってきた文学界の文化的立場について明らかにしていきたい。

#### (2) マンガ 小田

- (i) 前回に引き続き資料収集中。
- (ii) 今までにはしりあがり寿の活動についてのインタビュー記事などを探していたが、彼がかったマンガも読んでいくつもり。また比較という観点からほかの漫画家の作品も検討する。 ・マンガで表現していること悪いことの線引きとは・・・？

#### (3) アニメ映画監督 中場

- (i) 「熱風」という雑誌のなかで、宮崎駿監督、スタジオジブリのプロデューサーである鈴木俊夫、また衆議院議員や株式会社の方など様々なジャンルのひとたちが東日本大震災の被災地の現状、震災への日本政府の対応、原発問題について対談している記事を見つけそれを読み込んでいるところ。
- (ii) これらの記事のなかの宮崎駿の「脱原発の横断幕」のエピソードから、彼が原発につ

いてどのような考えを示しているのか、またそれに対して周囲の反応どうであったかなどもみていきたい。

(4) マンガ・アニメのイベントが生み出すもの 浜田

(i) アニメ聖地巡礼におけるファンと地域住民との関係について調べているところ。いくつかの事例も見つかっている。

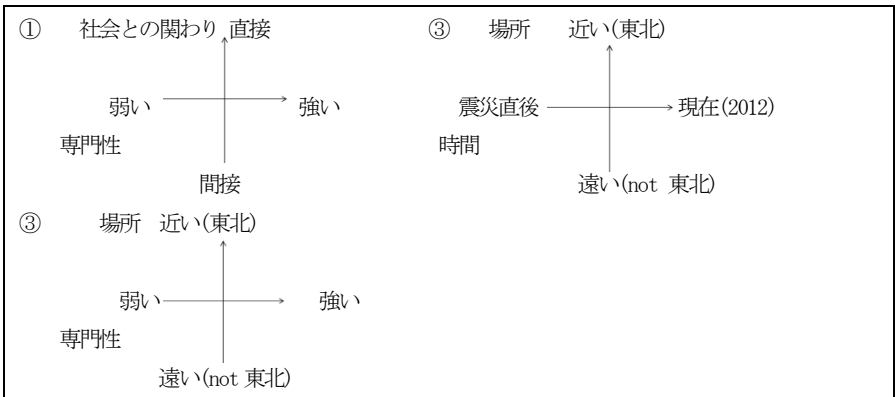
(ii) アニメ・アニメイベントが人同士のつながりを媒介する力を持っているという方向で、いくつかの関連する資料を読み込みながら検討していきたい。

② パフォーマー班発表用レジュメ

「パフォーマー」のジャンル・音楽、スポーツ、伝統芸能、ジャーナリスト等

⇒班のメンバー全体で共有できる軸を決定する。

以下の座標軸にいろいろな人を分類することは可能か



⇒方向性 各ジャンルにおける支援言説を細かく分析し、上記のような軸を用いて分類する。4分類 (I～IV) の分布の特徴から新しいジャンルを提示し定義付けを行う。論の構成、章立ては未定。新ジャンルの発見から章立てを練る可能性あり。



【資料⑧】2月5日 第15回 配布プリント

身体文化学演習 ～編集・プロジェクト企画実習編 鈴木康史 20130205

①編集作業 2月15以降、3月半ばまで、3月末には納品を受けねばならない

・編集作業の概要

書籍名の検討、各章タイトルの検討、各論文の配置の検討、文章のチェック～各著者とのやり取り

表紙～全体のデザインの検討、全体の体裁の統一、誤字脱字チェック

業者の選定、依頼から受け取りまで

予算管理

・私が編集長、皆さんが各編集者のようなイメージ

・誰に/何を読ませるのか？どのようにして広報するのか、ネットを使うのか？

②和合亮一氏公開講座（文学部公開講座として開催） 7月13日（土）@記念館

・広報 3か月前（4月あた）から開始

誰に来てもらうのか、どこに配ればいいのか、ネットはどう使うか

ポスター、チラシ、HP、FB・・・をどうデザインしどう使うか？

・講演会の中身の打ち合わせ（和合氏と）

どんなふうに接すればいい？

・学生による和合氏インタビュー

何を訊ねると面白いインタビューになるのか

これまで彼が語らなかったことを引き出せるか

そのための情報収集 著作、Twitter、ネット動画、さまざまな記事

=どんな情報を集めたらいい？

・当日のための予備的準備

タイムスケジュールの設定、必要な資料を洗い出す

仕事は自分で作り出す！！新しいことはそうして生まれてくる。そういう感覚ありますか？

全体を眺めながら、そして全体が行くべき方向を理解しながら、自分がここで何をすればこのプロジェクトがより良くなるのかを、過去の例なども調べて参考にしながら、考え、実践する。

=実はこれはこれまでやってきた/これからやる論文執筆と同じなんです。